

日韓における「二重ヲ格(reul)構文」の再検討 —数量詞構文における認可条件—

安祥希(筑波大学大学院生)

0. はじめに

日本語と韓国語はともに「二重ヲ格標示¹⁾」の現象が見られる。二つの名詞句(以下、前の名詞句をNP1、後ろの名詞句をNP2とする)にヲ格(韓国語の場合、“ruel”²⁾)が二つ標示されるものであるが、両言語は文法性に違いがある。

- (1)a. 太郎が次郎{*ヲ/ノ}顔ヲ殴った。 (2)a. スヒがスニ{*ヲ/ニ}りんごヲあげた。
b. 타로-가 지로{-를/의} 얼굴-을 때렸다. b. 수희-가 순이{-를/에게} 사과-를 주었다.
taro-ga jiro{-reul/ui} eolgur-eul ttaeryeotda. suhui-ga suni{-reul/ege³⁾} sagwa-reul jueotda.

(1)は「対象-対象」の例、(2)は「受け手-対象」の例である。日本語は、NP1をヲ格で示せず、二重ヲ格制約を受ける。それに対応する韓国語は文法的である。韓国語では、一般的にこのような現象を顕著な構文の特徴として扱い、二重“ruel”を許すとし、上記以外の構文でも二重“ruel”が現れる。

ここで、二重ヲ格(reul)の数量詞構文⁴⁾について見てみよう。

- (3)a. *彼は魚ヲ4匹ヲ買った。
b. 그-는 생선-을 4마리-를 샀다.
geu-neun saengseon-eul 4mari-reul satda.

(3a)は数量詞(以下、Q)にヲ格が接続しているが、日本語では非文法的である。それに対応する(3b)の韓国語は適格な文となる。

本発表では、二重ヲ格(reul)が現れる構文を検討し、それを踏まえて二重“ruel”の数量詞構文について考察を行う。

1. 二重ヲ格(reul)構文における距離の設定

尹(2001)は、日韓における「二重対格構文」⁵⁾の文法性は一致しないとし、日本語では不適格であるが、韓国語は容認され得るといふ。

尹(2001)によると、日本語でも「同一音連続の回避」の条件を付ければ、二重対格構文が可能であるという。これはNP1とNP2の間に挿入句がある場合、容認度が高くなるというものである。ヲ格の「連続の回避」という捉え方は、「距離を離す」という意味で柴谷(1978)、杉本(1986)などで取り上げている。しかし、杉本(1986)で対格の目的語とされるものの連続は許容されないとされている。

¹⁾ 言語や学者によって名称は様々であるが、本発表では、「二重ヲ格」と称する。

²⁾ 音韻論的異形態として、“ruel/eul”で使い分けされる。本発表では便宜上、“ruel”で記す。ローマ字表記は、「文化観光部告示第2000-8」に従い、助詞の前には「-」を入れる。

³⁾ 先行名詞が無・有生物かによって“e/ege”に使い分けされる。

⁴⁾ 「数詞+助数詞」を数量詞とし、数量詞が現れた構文でヲ格(reul)を二つとる形式の文をいう。

⁵⁾ 尹(2001)では、本発表でいう「二重ヲ格構文」を「二重対格構文」と呼んでいる。

(4)*山田先生は生徒達を, 毎日10個, 英単語を覚えさせた。

(杉本1986:289)

上記のように「毎日10個」を挿入して距離を離しても非文となる。韓国語は、このような距離の設定が必須条件ではないが、より自然さが増すことは否定できない。

(4)' 아마다 선생님-은 학생들-을 (매일 10개) 영어단어-를 외우게 했다.

yamada seonsaengnim-eun haksaeungdeur-eul (maeil 10gae) yeongeodaneo-reul oeuge haetda.

(5) 김씨-는 그 여자-를 며느리-를 삼았다.

gimssi-neun geu yeoja-reul myeoneuri-reul samatda.

金氏はあの女ヲ嫁ヲした。(=金氏はあの女を嫁として迎えた)

(4)'は挿入句の有無にかかわらず自然で、(5)も“ruel”が隣接しているが文法的である。そのため、韓国語における距離の設定は副次的条件と見なして良いと考えられる。

一方、日本語においてヲ格が重複して現れる場合、距離の設定で文法性が上がるのは、杉本(1986)でいう「移動補語」と「状況補語」⁶の場合に限るようである。

(6)a. [?]隊長はおびえる部下を 壊れかかった橋を渡らせた。

(杉本1986:288)

b. 隊長はおびえる部下を, 有無を言わずに, 壊れかかった橋を渡らせた。

(同上)

(7) 吹雪の中を山中をさまよった。

(杉本1993:26)

(6)は、「移動補語(橋ヲ)」と共に、挿入句によって座りがよくなる場合である。そして(7)は、「状況の「を」とされるもので、ヲ格が接続しているが、「吹雪の中を」と「山中を」がそれぞれ「状況の「を」と移動格の「を」として別のものと見なされるため、ヲ格の連続が可能となる。詳細は、杉本(1986)と杉本(1993)を参照されたい。

韓国語の場合は、距離の設定において日本語と異なる様相を見せることを確認したが、いわゆる「移動補語」と「状況補語」の構文でも挿入句がなくても良いと考える。挿入句の置かれていない(6)'も自然である。韓国語において“ruel”同士の間隔は、それ程意味を持たないといえる。

(6)' 대장-은 (무서워하는) 부하-를 (무너져 가는) 다리-를 건너게 했다.

aejang-eun (museowohaneun) buha-reul (munoejyeo ganeun) dari-reul geonneoge haetda.

隊長は(おびえる)部下ヲ (壊れかかった)橋ヲ渡らせた。

(7)' 눈보라 속-을 산 속-을 헤맸다.

nunbora sog-eul san sok-eul hemaetda.

吹雪の中ヲ山中ヲさまよった。

2. “ruel”の性質

2.1 NP1とNP2の語順の入れ替え

冒頭で日韓の違いとして、韓国語では相手の二格を“ruel”で表せるが、日本語はヲ格で示せず、

⁶ 杉本(1993)では、「状況の「を」」が移動格の「を」に含まれるとしている。

ヲ格の連続は規則に違反するものと述べた。そのため、日本語については検討の余地がないが、韓国語の一つの現象として取り上げることとする。(2)は、再掲である。

(2)a. 수희-가 순이-를 사과-를 주었다.
suhui-ga suni-reul sagwa-reul jueotda.

*스비가 스니ヲ りんごヲあげた。

(8)a. 어느 학생-을 신문-을 건넸다.
eoneu haksang-eul sinmun-eul jueotda.

*ある学生ヲ 新聞ヲ渡した。

b. 수희-가 사과-를 순이-를 주었다.

suhui-ga sagwa-reul suni-reul jueotda.

*스비가 りんごヲ 스니ヲあげた。

b. 신문-을 어느 학생-을 건넸다.

sinmun-eul eoneu haksang-eul jueotda.

*新聞ヲ ある学生ヲ渡した。

(2)と(8)はそれぞれ、述語が「あげる」と「渡す」の構文(以下、「あげる」構文)で、「스니」と「りんご」⁷、「ある学生」と「新聞」の語順が入れ替わる。与え手から受け手にモノが移動するという点で共通する。これに対し以下の「もらう」の場合、二重“ruel”は非文となり、NP1とNP2の入れ替えも不可能である。

(9)a. *수희-가 순이-를 사과-를 받았다.
suhui-ga suni-reul sagwa-reul badatda.

*스비가 스니ヲ りんごヲもらった。

b. *수희-가 사과-를 순이-를 받았다.

suhui-ga sagwa-reul suni-reul badatda.

*스비가 りんごヲ 스니ヲもらった。

上記のようなモノの移動ではなく、抽象的なモノ(例えば、「칭찬-을(賞賛ヲ)」や「사인-을(サインヲ)」)の移動の場合も二重“ruel”は現れ得ず、語順の変更も禁じられる。ヲ格目的語は働きかけの対象であるのに対し、「もらう」の二格名詞句は働きかけの対象ではないため、「もらう」構文で“ege”の代わりに“ruel”を付与することはできないと考えられる。「あげる」構文では、NP1とNP2が働きかけの対象となるため、“ruel”の付与が可能となる。日本語では二重目的語制約があるため、二格で示さないといけないが、韓国語はそのような制約を受けないためと解釈できる。

要するに、“ruel”は動作の対象という意味役割を基底に、「対象性」という性質が潜在しており、相手の意味役割を持つNPが“ruel”の付与によって「対象化した相手」に転換されるのである。そのため、語順の入れ替えも可能と考えられる。さらに、(10)受け手が“ege”の場合のNP1とNP2の交替、(11)受け手が“ruel”で現れた場合のNP1とNP2の交替の文をみると、

(10)a. 순이-에게 사과-를 주었다.
suni-ege sagwa-reul jueotda.

스니ニりんごヲあげた。

b. 사과-를 순이-에게 주었다.

sagwa-reul suni-ege jueotda.

りんごヲ스니ニあげた。

(11)a. 순이-를 사과-를 주었다.

suni-reul sagwa-reul jueotda.

스니ヲりんごヲあげた。

b. 사과-를 순이-를 주었다.

sagwa-reul suni-reul jueotda.

りんごヲ스니ヲあげた。

少なくともこのような単文である場合、文法性に大きな違いはなく、NP1とNP2の移動も自由である。“suni-ege”と“suni-reul”は、働きかけの対象を示すという点で文法的に等価であるといえる。語

⁷ 韓国語の例について説明する際、便宜上、日本語に置き換えて示す。

順の入れ替えが可能なのは、“ruel”が働きかけの対象として対象化することの表れであろう。

2.2 ヲ格(reul)使役構文とニ格(ege)使役構文

2.1に次いで、ヲ格(reul)の性質の検討として、ヲ格(reul)とニ格(ege)が交替し現れる使役構文について検討する。

まず、日本語は、他動詞の場合、被使役主の他に対象が存在することになり、被使役主にヲ格を与えることができず、ニ格で標示され、自動詞の場合は、(13)のようにヲ格とニ格の交替が見られる。

(12) 太郎が 次郎 {ニ/*ヲ} 本ヲ 読ませる。

(13) 太郎が 次郎 {ニ/ヲ} 走らせた。

Tonoike(1978)は、意味的特性として、ニ格使役文を、被使役主が意図を持ちながら“self-controllable action”する文、ヲ格使役文を“causation in general”とみた。竹林(2007:185)は、ヲ使役のほうがニ使役より、使役主体の使役対象に対する関与・影響の程度が強いと見た。日本語は、使役構文でもヲ格の重複は禁じられ、交替が許される(13)のような場合は、ニ格とヲ格で文意が異なる。

次に、韓国語の使役構文のタイプを見てみる。それぞれ、(12)と(13)に対応する韓国語である。

(12)' 타로-가 지로 {-에 게/를} 책-을 읽히었다.
taro-ga jiro {-ege/reul} chaek-eul ikhieotda.

(13)' 타로-가 지로 {-에 게/를} 달리게 했다.
taro-ga jiro {-ege/reul} dallige haetda.

日韓の相違を決定づける点は2つある。一つ目は、(12)'のように韓国語は二重“ruel”の使役構文が成立すること、二つ目は、述語の形態による“ruel”の現れ方にある。

(12)'と(13)'の述語は、“-hi+da”と“-ge+hada”とで形式が異なる⁹。前者は、“lexical causatives”¹⁰とされるもので、動詞の語幹+使役の補助語幹¹¹(例文は“-hi”)+“da”の結合であり、単文構造を取り、後者は、“periphrastic causatives”とされるもので、動詞の語幹+副詞形“-ge”+“hada(補助動詞)”の組み合わせで、補文構造を取る。本発表では、前者を「語彙的使役」と、後者を「迂言的使役¹²」とし、比較、検討する。

이(Lee2004)は、本発表でいう迂言的使役における“ege”は、被使役主の自制が利く場合にだけ現れ、“ruel”は行為の影響を受けるか、状態の変化を経験する対象に付くとし、被使役主がある行為を遂行することを含意しないとする。これは迂言的使役にだけ見られる特徴なのか。

(14)a. 어머니-가 강제로 아이 {-에 게/를} 걸리었다. b. 어머니-가 강제로 아이 {-에 게/를} 걸게 했다.
eomeoni-ga gangjero ai {-ege/reul} geollieotda. eomeoni-ga gangjero ai {-ege/reul} geotge haetda.
お母さんが強引に子ども {ニ/ヲ} 歩かせた。 お母さんが強引に子ども {ニ/ヲ} 歩かせた。

それぞれ、語彙的使役と迂言的使役である。使役構文における“ruel”は、実行される行為の被使役

⁸ 一般的には、縮約形の「읽혔다[ikhyeotda] (読ませる)」を用いるが、語の構成を示すため、原形で示す。

⁹ このような違いが表れるのは、動詞の語幹に使役の補助語幹が付けられない場合が存在するからである。“shikida(させる)”の形式も存在するが、これはいわゆる「VNhada(VNする)」にかかわる問題であるため、今回は除外する。

¹⁰ 単文構造で使役を作れない動詞は、“-ge+hada”の形が適用されることとなる。

¹¹ 他の補助語幹として、“-i”、“-li”、“-ki”がある。動詞の語幹によって使い分けられる。

¹² 一般に「ge-hada使役構文」と呼ばれるが、語彙的使役との比較のため、迂言的使役と命名する。

主としての役割をすると見なされる。「強引に」を挿入すると、“ege”より“rue1”とのかかわりが自然である。つまり、“rue1”は非意志的、つまり強制に近いと考えられ、“ege”は、「気絶させる」のような意志的でない文で使えないことで、意志的、つまり、許可となる。結果、“rue1”が働きかけの対象を示すという2.1節で示した機能と合致することが確認できる。

要するに、使役構文における“rue1”は、語彙的・迂言的というタイプの違いと関係なく、対象化され得るといえる。

上記を踏まえて、「あげる」構文と同様に、NP1とNP2の入れ替えを行い、考えてみる。(15)は語彙的使役、(16)は迂言的使役である。問題は、(16b)の“rue1”の座りが悪いことである。

- | | |
|--|--|
| <p>(15) a. 아이 {-<u>에게/를</u>} 책-<u>을</u> 읽히었다.
 ai {-<u>ege/reul</u>} chaek-<u>eul</u> ikhieotda.
 子ども {ニ/ヲ} 本ヲ読ませた。</p> <p>(16) a. 아이 {-<u>에게/를</u>} 책-<u>을</u> 읽게 했다.
 ai {-<u>ege/reul</u>} chaek-<u>eul</u> ikge haetda.
 子ども {ニ/ヲ} 本ヲ読ませた。</p> | <p>b. 책-<u>을</u> 아이 {-<u>에게/를</u>} 읽히었다.
 chaek-<u>eul</u> ai {-<u>ege/reul</u>} ikhieotda.
 本ヲ子ども {ニ/ヲ} 読ませた。</p> <p>b. 책-<u>을</u> 아이 {-<u>에게/??를</u>} 읽게 했다.
 chaek-<u>eul</u> ai {-<u>ege/reul</u>} ikge haetda.
 本ヲ子ども {ニ/ヲ} 読ませた。</p> |
|--|--|

“ege”の場合、入れ替えができることから、(16b)の不自然さは二重“rue1”によるものと考えられる。「あげる」構文では入れ替えが容認されることを考えると、「あげる」構文と迂言的使役では“rue1”の振る舞いが一致しないことと判断できる。

(16b)は、単純に考えると格が一致してしまい、名詞句の意味役割が判断しにくくなるからと考えられるが、同じ構造の(15a)の語彙的使役の場合は、入れ替えが可能である。「あげる」構文の現象も考え合わせると、単文構造をとる場合(語彙的使役)は、入れ替えが可能で、補文構造をとる場合(迂言的使役)は、入れ替えが不可ということになるようである。今後の課題となるが、二つの使役の構造の違いを考える必要がある。

3. 二重ヲ格(reul)の数量詞構文

今までの知見を踏まえて、数量詞構文における二重ヲ格(reul)の条件について分析する。

3.1 数量詞構文のタイプ

日本語における数量詞構文で、数量詞にヲ格が接続することは文法的ではない。そのため、日本語においては二重ヲ格の数量詞構文はそもそも非文となる。一方、韓国語は、二重“rue1”の数量詞構文の文法性は高いと考えられる。また、(17)のような副詞的な働きをするタイプも存在する。

- | | |
|---|-------------|
| <p>(3) 그-는 생선-<u>을</u> 4마리-<u>를</u> 샀다.
 geu-neun saengseon-<u>eul</u> 4mari-<u>reul</u> satda.
 *彼は魚ヲ4匹ヲ買った。</p> <p>(17) 나는 오늘 하루 우유-<u>를</u> 3번-<u>을</u> 마셨다.
 naneun oneul haru uyu-<u>reul</u> 3beon-<u>eul</u> masyeotda.
 *私は今日一日牛乳ヲ3回ヲ飲んだ。</p> | <p>(再掲)</p> |
|---|-------------|

3.2 数量詞構文の文中の条件と“rue1”の性質

二重“rue1”の数量詞構文は、今まで観察してきた他の構文と異なり、NP¹³とQの語順の入れ替えが不可能である。語順の入れ替えは不可能であるが、各々の(a)文を見ると、連続を避けるために距離を置く必要はないことが確認できる。距離の設定は日本語に厳しく作用するようである。

(18) a. 햄스터가 나뭇가지-를 1개{-를/∅} 잡아먹고 있다.

haemseuteo-ga namutgaji-reul 1gae{-reul/∅} galgameokgo itda.

ハムスターが枝ヲ 1本{ヲ/∅}かじっている。

b. 햄스터가 1개{*를/*∅} 나뭇가지-를 잡아먹고 있다.¹⁴

haemseuteo-ga 1gae{*reul/*∅} namutgaji-reul galgameokgo itda.

ハムスターが1本{ヲ/∅} 枝ヲかじっている。

(19) a. 할머니가 사과-를 3박스{-를/∅} 보냈다.

sigol-e saneun halmeoni-ga sagwa-reul 3bageseu{-reul/∅} bonaessda.

おばあさんがりんごヲ 3ボックス{ヲ/∅}送った。

b. 할머니가 3박스{*를/*∅} 사과-를 보냈다.

halmeoni-ga 3bageseu{*reul/*∅} sagwa-reul bonaessda.

おばあさんが3ボックス{ヲ/∅} りんごヲ送った。

語順の入れ替えが不可能であり、今までの構文とは異なるものであると考えられる。韓国語の数量詞の構造的位置の問題で、他のものとは別扱いすべきであるが、ここでは現象の指摘に留めておきたい。

次は、Qに後接する“rue1”の性質について検討する。副詞の挿入による現れ方の様相を観察する。以下は(18)の修正で、(20a)は「一秒で」、(20b)は「とてもゆっくり」を挿入した文である。

(20) a. 햄스터가 나뭇가지-를 1초 만에 1개-를 잡아먹었다.

haemseuteo-ga namutgaji-reul 1cho mane 1gae-reul galgameogeotda.

ハムスターが枝ヲ1秒で1本ヲかじった。

b. 햄스터가 나뭇가지-를 아주 천천히 1개-를 잡아먹고 있다.

haemseuteo-ga namutgaji-reulaju cheoncheonhi 1gae-reul galgameokgo itda.

ハムスターが枝ヲとてもゆっくり1本ヲかじっている。

(20a)は、ハムスターが1秒という短い時間に枝を1本まるごとかじれないと思っていたが、結果的に1秒で1本を全部かじれたという意図がうかがわれ、予想より結果が上回ったことを表す。同様に(20b)は、静的な状態の持続を描写している文であるが、何時間もその1本だけに夢中になってかじっているという意図が読み取れる。このような読みが“rue1”によるものなのかを検証するために、Qに“rue1”を付けずに検討してみる。

(20)' a. 햄스터가 나뭇가지-를 1초 만에 1개-∅ 잡아먹었다.

haemseuteo-ga namutgaji-reul 1cho mane 1gae-∅ galgameogeotda.

ハムスターが枝ヲ1秒で1本かじった。

¹³ ここでは、Qに先行する名詞句を指す。

¹⁴ ポーズが入れると言えなくはないが、言い直しに近いので、本発表の対象と同じものとは考えない。

b. 햄스터가 나뭇가지-를 아주 천천히 1개-∅ 잡아먹고 있다.

haemseuteo-ga namutgaji-reul aju cheoncheonhi lgae-∅ galgameokgo itda.

ハムスターが枝ヲとてもゆっくり1本かじっている。

(20)に比べ(20)'では、単純に眼前の事実として語られ、「1本を全部」、「1本だけに」のような読みを取り立てようとする意図が弱いと考えられる。要するに、数量詞構文における“ruel”の性質は、「程度の強調(取りたて)」であると考える。強調の意味合いが出る根拠として、さらに以下の例文を示す。

(21)a. ??점심-을 1공기-를 먹었다.

jeomsim-eul 1gonggi-reul meogeotda.

ランチヲ1杯ヲ食べた。

b. 점심-을 3공기-를 먹었다.

jeomsim-eul 3gonggi-reul meogeotda.

ランチヲ3杯ヲ食べた。

ランチでご飯を食べる状況で特別な状況を想定しない限り、一人1杯が一般的であろう。(21a)では、一般的な状況を取り出して強調する理由がないため、“ruel”が付くことによって若干座りが悪いように感じられる。一方、(21b)は、「その日に限って3杯も食べた」という意図が読み取れる。1杯に比べ、3杯の方が強調の必要性が高く、(21b)の方がより適切な文と考えられる。

以上で、程度の強調の性質を持つ“ruel”の存在について見てきた。ところで、3.1で以下のような、日本語には見られないタイプの数量詞構文を挙げた。

(17) 오늘 하루 우유-를 3번-을 마셨다.

(再掲)

oneul haru uyu-reul 3beon-eul masyeotda.

今日一日牛乳ヲ3回ヲ飲んだ。

このようなタイプについて、이(Lee2004:212)は、「伝達の強度(communicative dynamism)が高い」と述べ、“ruel”との結合によりその意味が少し強調されるとした。意味の強調は先の分析と通じるところがある。すると、数量詞構文(以下、タイプ I)と副詞的な数量詞構文(以下、タイプ II)の違いはないのだろうか。それで、以下を提示し、検討を行う。

(22)a. *3공기-를 점심-을 먹었다.

3gonggi-reul jeomsim-eul meogeotda.

3杯ヲランチヲ食べた。

a'. *3공기-∅ 점심-을 먹었다.

3gonggi-∅ jeomsim-eul meogeotda.

3杯ランチを食べた。

b. ?오늘 하루 3번-을 우유-를 마셨다.

oneul haru 3beon-eul uyu-reul masyeotda.

今日一日3回ヲ牛乳ヲ飲んだ。

b'. 오늘 하루 3번-∅ 우유-를 마셨다.

oneul haru 3beon-∅ uyu-reul masyeotda.

今日一日3回牛乳ヲ飲んだ。

上記は、タイプ I とタイプ II のNPとQの入れ替えを行い、なおかつ、Qの“ruel”がない場合で、文法性を測ったものである。タイプ I (22a)は、語順の入れ替えが厳しい上に、Qの“ruel”がない場合も自然さが落ちる。一方、タイプ II (22b)は、語順を入れ替えると少し落ち着きが悪くなるが、Qに“ruel”が付加されないと自然さが上がる。すなわち、タイプ II はNPの前に前置できるが、「数量詞-∅」の形で移動することが望ましいということになる。

4. 各構文における“ruel”の様相

ここでは、二重“ruel”の現れる構文を再度取り上げ、その中の“ruel”の様相を観察する。

- | | | |
|--|---|-----------|
| (11) a. <u>순이-를 사과-를</u> 주었다.
suni- <u>reul</u> sagwa- <u>reul</u> jueotda.
スニヲりんごヲあげた。 | b. 사과- <u>를</u> 순이- <u>를</u> 주었다.
sagwa- <u>reul</u> suni- <u>reul</u> jueotda.
りんごヲスニヲあげた。 | 「あげる」構文 |
| (15) a. <u>아이-를 책-을</u> 읽히었다.
ai- <u>reul</u> chaek- <u>eul</u> ikhieotda. | b. 책- <u>을</u> 아이- <u>를</u> 읽히었다.
chaek- <u>eul</u> ai- <u>reul</u> ikhieotda. | 語彙的使役 |
| (16) a. <u>아이-를 책-을</u> 읽게 했다.
ai- <u>reul</u> chaek- <u>eul</u> ikge haetda.
子どもヲ本ヲ読ませた | b. ?? 책- <u>을</u> 아이- <u>를</u> 읽게 했다.
chaek- <u>eul</u> ai- <u>reul</u> ikge haetda.
本ヲ子どもヲ読ませた。 | 迂言的使役 |
| (23) a. <u>점심-을</u> 3공기 { <u>-∅/를</u> } 먹었다.
jeomsim- <u>eul</u> 3gonggi {-∅/ <u>reul</u> } meogeotda.
ランチヲ3杯 {∅/ヲ} 食べた。 | b. 3 공기 { <u>??-∅/??</u> 를} <u>점심-을</u> 먹었다.
3gonggi {-∅/ <u>reul</u> } jeomsim- <u>eul</u> meogeotda.
3杯 {∅/ヲ}ランチヲ食べた。 | タイプ I のQ |
| (24) a. <u>우유-를</u> 3번 { <u>-∅/을</u> } 마셨다.
uyu- <u>reul</u> 3beon {-∅/ <u>eul</u> } masyeotda.
牛乳ヲ3回 {∅/ヲ} 飲んだ。 | b. 3 번 { <u>-∅/?</u> 을} <u>우유-를</u> 마셨다.
3beon {-∅/ <u>eul</u> } yu- <u>reul</u> masyeotda.
3回 {∅/ヲ}牛乳ヲ飲んだ。 | タイプ II のQ |

「あげる」構文と語彙的使役が類似した振る舞いを見せ、迂言的使役とQにおけるタイプ I とタイプ II が類似した振る舞いをするのが分かる。しかし、Qにおけるタイプ I と II は自然さに差が見られるため、厳密にタイプ II のQと迂言的使役が同じ振る舞いであるとはいえないと考える。

5. まとめ

日韓における二重ヲ格(reul)構文の再検討として、距離の設定や語順の入れ替えによる様相を見、全体を通して韓国語の二重“ruel”における“ruel”は、働きかけの対象を示し、対象化させる性質を持つと述べた。また、“ruel”の振る舞いという観点で、各構文を比べた結果、「あげる」構文と語彙的使役、迂言的使役とタイプ I のQが類似することを確認した。

【主要参考文献】

- Shibatani, Masayoshi(1977) “Grammatical Relations and Surface Cases.” Language Vol. 53 No. 4, pp. 789-809
- Tonoike, Shigeo(1978) “On the Causative Constructions in Japanese.” John Hinds and Howard Irwin (eds.) Problems in Japanese Syntax and Semantics, Kaitakusha
- 尹亨仁(2001) 「韓国語と日本語の二重対格標示について—成立条件を中心に—」『日本学報』第47輯、pp. 93-108、韓国日本学会
- 柴谷行良(1978) 『日本語の分析』大修館書店
- 杉本武(1986) 「第3章 格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』pp. 226-391、凡人社
- (1993) 「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学篇)』6号、pp. 25-37
- 竹林一志(2007) 『「を」「に」の謎を解く』笠間書院
- 이선희(2004) 『국어의 조사와 의미역-조사 {-를} 과 논항 실현을 중심으로-』한국문화사